

2014年  
6月6日  
金曜日

# 恐怖の横断歩道

松枝法道 教授（環境経済学）

私は信号のない横断歩道が怖い。歩行者の私は、あの白い縞模様を見るたびに心拍数が上がるのを感じる。なぜそんなことになってしまったのか、話は8年前のニュージージーランド旅行にさかのぼる。

そのころ、私と家族はニュージージーランドの自然や食べ物に気が入りはじめ、大学の春休みを利用して、レンタカーでニュージージーランドの南島を巡る旅を企画した。南島の最大都市クライストチャーチの市街を気持ちよくドライブしていたところ、突然大きな怒鳴り声が車の背後から聞こえた。バックミラーをのぞくと、道端でおばあさんがセーターを頭上で大きく振り回しながら私たちの車に向かって叫んでいる。おばあさんは、なぜそれほどまでに私に怒っていたのか。それは私が横断歩道で停止しなかったからだ。「横断歩道においては、歩行者が勝んでいるときは停止する、たとえ歩行者がいなくても徐行する。」そんなことくらい運転免許を取ったときには知っていたはずだった。しかし、日本で何年も車を運転するうちに、横断歩道の存在にさえ、ほとんど気に留めない「違法ドライバー」になつていたのである。日本には当時の私のようなドライバーが9割以上いるとされる。それに対して、ニュージージーランドで

は歩行者が近くにいる横断歩道では、ほぼ確実に自動車が一時的に停止する。両国の道路交通法はそれほど変わらないのに、なぜこれまでに状況は違うのだろうか。ニュージージーランドのドライバーはモラルが高いからだと思われるかもしれない。しかし、私は自分の個人的経験から、人格的な成熟度という点では両国の平均的な国民に大きな差があるとは思えない。実はゲーム理論という考え方をを用いると、全く同等なドライバーと歩行者を前提としても、ある場所では常に歩行者が優先されるといって成立することを示すことができる。いったんどちらかの均衡が成立すれば、それを自ら逸脱する行為は、自分にとつての損を意味する。たとえば、歩行者が常に「待ってくれる」日本では、警察も横断歩道の無視を取り締まらないうえ、車の運転手は違法行為を行ってさかさか、車の運動は違法行為でなく、倒れてよいと思うのだから、そういう車が十分に多い限り、歩行者が日本の慣習に従わないことは怪我や死につながってしまうかもしれない。実際、日本に遊びに来たニュージージーランドの友人は日本のドライバーが横断歩道で攻撃的な

のには驚いたという感想を漏らしていた。私は横断歩道については、ニュージージーランドの環境が好きだ。法律で決まっているからではなく、物理的に脅威を与えている存在である車の方が弱者である歩行者に優しくふるまっている精神が心地よいからだ。

それでは、日本の状況を変えることができるのだろうか。私は可能だと思ふ。たとえば、政府が音頭をとり、百貨店などがそれに乗って普及させた「クール・ビズ」などは、私個人に大きな恩恵をもたらしてくれた。クール・ビズや「ワーム・ビズ」が流行する前までは、ほぼ毎日ネクタイをして授業をしていた私も、今やネクタイは卒業式の日にしかなることが無くなった。それまでに定着している慣習から抜け出すために必要なのは、十分に多い人たちがコーディネートして、それまでの慣習から外れた行動をとり始めることである。もし日本の歩行者の大半が道路交通法に定められた横断歩道に関する権利を主張して、いっせいに横断歩道で待つことをやめれば、日本にもニュージージーランドのような横断歩道が現れるだろう。要はドライバーにある確率以上で横断歩道を渡る歩行者がいることを認識させることなのだ。

ニュージージーランドから帰った後、車を運転しているときには常に横断歩道が気になるようになった。横断歩道で一時的に停止すると、ちよつとした楽しみが待っている。たいていの歩行者は、少しためらい、対向車線から車が来ていないことを確認して、軽く会釈をして足早に横断歩道を渡してくれる。中には大きく手を振って微笑みかけてくれるような子供もいる。また、こつちが止まると、対向車線の車も止まって、それが自分の満足感へのプラスとなる。

問題は歩行者としての自分だ。しばらくの間、私は横断歩道であえて「飛び出す」行為を繰り返していた。別に急いでいるわけでもないのに、危険なことをする自分がよくわからなかった。そのうち、私は横断歩道を怖がるようになってしまった。今ではたとえ10メートルさきにも横断歩道があったとしても、あえて車道を横切るようにしている。横断歩道に立つとついつい「チャレンジ」してしまうからだ。いつになったら、「いっそのことに日本に横断歩道なんてなかったらいいのらうか。」という思いをなくすことができるだろうか。